

派遣者番号	30K21	氏名	田岡 耕哉
研究主題 —副主題—	小学校特別支援教室の若手教員を育てるコンサルテーション		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	高橋 あつ子
所属校	世田谷区立希望丘小学校	校長	細川 力

キーワード：若手育成 コンサルテーション 対等な関係 問題解決

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

東京都では、10年以上前からベテラン教員等の大量退職により、毎年、若手教員が大量に採用され、新しい研修体系の実施や校内での組織的対応を行っている。特別支援教室でも人員を確保するために、若手教員が大量に採用されている。

しかし、若手教員は教員養成段階では専門的な指導力を身に付けていないことが多い。具体的には、特別支援教育に関する一定の知識や技能をもつこと、児童のアセスメントをすること、アセスメントをもとに授業の展開や指導ができること、各機関との連携・保護者との連携がとれること等が必要である。そのため、若手教員に専門的な指導力を身に付けさせ育成していくことが、特別支援教育推進上、喫緊の課題であると考えられる。

そこで、本実践では、特別支援教室若手教員(以下「若手教員」)が課題と感じている「アセスメントをもとにした指導」を中心にコンサルテーションを行い、若手教員の問題意識に寄り添い、一緒に問題解決を図っていく。そして、問題解決を通じて、私(コンサルタント)が若手教員の指導力を育成できることを目的として取り組んだ。

2 研究の内容・研究の方法

(1)対象 公立A小学校特別支援教室若手教員1名(コンサルティ)

対象児童は、コンサルティが指導に課題を感じる児童3名であり、大半を在籍学級で過ごし、特別支援教室で個別指導と小集団指導を受けている。

(2)時期 2018年9月～11月にかけて15日間(コンサルテーション15回)

(3)コンサルテーションの内容

- ①対象児童3名を在籍学級授業観察等のアセスメントを行い、その結果を基にコンサルティと指導方法を検討した。

②特別支援教室教員の勉強会を実施した。アセスメントのやり方、授業観察時のアセスメントシートの使い方を説明した。また、特別支援教育に関する情報提供を行った。さらに、コンサルティが対象児童の在籍学級の授業での観察をするときに、アセスメントシートを用いた。

③アセスメントで集めた情報から児童の優先課題を決め、2学期の短期目標と手だてを具体的に考え設定し(個別指導計画の作成)、指導の際に生かすようにした。

④コンサルタントがコンサルティの授業観察とそれを基にコンサルテーションを行い、次回の授業計画を練ることを定期的に行った。コンサルテーションの際に「アセスメントを基にした個別指導」の熟達過程を評価するために、楠見(2012)を参考にルーブリック4領域5段階(以下「ルーブリック」)を作成し、活用した。

(4)実践の検討方法

①事後のコンサルティの意識や行動の変容を把握するために、2項目重複を含む質問紙6項目(以下「事後調査」)に回答を求めた後、補完するためのインタビューを実施した。

また、事後調査後のインタビューの質的分析を行い、事後調査と合わせて効果の検討を行った。

②コンサルティの授業観察を行い、記録およびルーブリックを使った分析をした。

(5)コンサルテーションを行う際の留意点

授業の振り返り等から指導の中でできていることを見付け価値付けしていくとともに、指導等の悩みを中心に一緒に解決していく。また、コンサルティ自身でアセスメントを基にした授業実践ができるように、対象児童への見立てと手だてを共有し、コンサルティが実行可能な提案をしたり、考えを尊重したりすることで対等な立場を貫けるようにした(小林2009)。

3 研究の結果

本実践前から、コンサルティは複数の児童に対して同じ教材を使ったり、その児童の前の担当教員の教材をそのまま使ったりする等、コンサルティ自身が集めたアセスメントを生かすことが難しい様子が見られた。そこで、アセスメントに基づいた手だてを複数紹介し、児童別に一緒に選ぶことを続けた。また、コンサルティの指導場面および児童の授業時の様子から、授業時の目標の提示および振り返りをする重要性、児童への課題の順番や量の工夫を確認した。その結果、授業のめあてや見直し（課題量や時間配分）を伝えるようになったり、課題を行う理由を説明したり、児童の状態を見ながら臨機応変に指導する様子が見られたりするなど、指導の在り方に変化が見られるようになった。

放課後のコンサルテーションでは、コンサルティから児童の具体的な様子を踏まえた指導方法の理由や児童への気付きから次の授業計画の構想を語る場面も見られるようになった。

4 研究の考察

(1)事後調査およびインタビューの結果と考察

事後調査後のインタビューから12の言説が得られた。分析の結果から、五つの定義と二つの概念に分類された(表1)。

コンサルティは事後調査で、「どんな指導をすればよいか分からなかった児童への課題が少しずつ見えてきた」と書いていた。また、番号1～3の具体的なインタビューから、コンサルティは「アセスメントをもとに児童の実態に合った指導ができるようになってきた」と感じていることが分かった。児童の課題に対しての具体的な指導方法が増えたことや、細かな児童の様子に気付き、対応できるようになったこと、短期目標「思いどおりにいかない場面を受け入れ、気持ちを切り替えること

ができる」に即して指導できるようになってきたことが考えられる。

(2)ループリックの結果と考察

ループリックをコンサルタントおよびコンサルティ自身で定期的に評価した。コンサルタントによるコンサルティのループリック評価は、コンサルテーション開始前に比べて授業やコンサルテーションのコンサルティの様子から授業力以外は上がった。

アセスメント力が上がったことで、授業の振り返りから様々な手だてを1人で考えることができるようになり、指導力が上がったと考えられる。

一方で、コンサルティ自身のループリック評価はアセスメントを活かした授業デザインは上がっているものの、内省については下がった。これは、コンサルティが「以前は、他の教員から指導方法を教えてもらい、そのまま授業時に生かせばよいと考えていたが、コンサルテーションを通じて、授業で自分ができていること、できていないことを細かく見られるようになったが、自分自身で指導方法を考えられないことが時々ある。」と話すとおり、自己評価が厳しくなったと考える。

5 今後の展望

対等な立場で授業の振り返りを重視したコンサルテーションを行うことで、コンサルティ自身が様々な手だてを講じることができるようになり、次の授業に生かすことができた。また、コンサルティは児童3名以外の指導方法について進んでコンサルティに質問することが増え、児童を見る視点が広がった。

一方で、コンサルティが主体的な姿勢で取り組むためのコンサルテーションの行い方、コンサルタントの専門性やコンサルテーションの時間の確保を検討していく必要がある。

表1 インタビューの分析により得られた概念

概念名	番号	定義	件数	インタビューの具体例
アセスメントを活かした指導力の向上	1	アセスメント能力の向上	2	子どもの問題点から、自分でも課題を考えられるようになってきた。
	2	観察力の高まり	3	指導をしていて、子どもへの気付き、様子で疑問に思ったことが増えた。
	3	授業力の向上	3	子どもの様子から、自分の授業を少し変えろとか、簡単にすることができるようになった。
自分の課題に対する考え	4	現状の課題	2	以前と大変なことが変わり、今は学校作り作成が大変。
	5	今後の課題	2	仕事をする優先順位を決めること。